

加藤 節先生の御退職に寄せて

法学部長 小林 登

加藤節先生は一九七四年四月に成蹊大学に講師として着任されて以来、本年三月に教授職を退職されるまで三十九年間の長きにわたって法学部および成蹊大学の教育に貢献されました。ここに学部長として一言お礼とお別れの言葉を述べさせていただきます。

加藤先生は、信州の名門校である長野県立深志高校を卒業の後、東京大学教養学部に入學、法学部に進學され、その後東京大学大学院法学政治学研究所修士課程、博士課程において福田敏一先生の指導の下に政治哲学を研究され、本學に赴任されておられます。

加藤先生の学問的業績は大きく分けて、第一にホブズ、スピノザ、ロックに代表される一七世紀政治思想の研究、第二に南原繁氏、福田敏一氏の系譜を継ぐ日本における政治学史の研究、第三に同時代の政治的状况に対する政治思想史の視点からの批判の三つの分野に分類整理することができます。

第一の分野における作品としては、博士論文をベースにした『近代政治哲学と宗教』に始まり、『ジョン・ロック

の思想世界』、そして心血を注いだロック『統治二論』の改訳を挙げることができます。加藤先生の研究の特徴は、日本では世俗主義的に理解されてきた社会契約論を、一七世紀という宗教戦争の時代（三〇年戦争、ピューリタン革命）の文脈において、当の思想家たちのキリスト教との内面的葛藤に即して解釈し直した点にあるということができ、『ジョン・ロックの思想世界』の副題が「神と人間との間」だったのもむべなるかなと言えます。

第二の領域では、政治学の実証科学化に南原繁氏が政治哲学を対置したように、加藤先生も政治学における現状分析志向、さらには現状肯定的な傾向に対して、国家や人権等の概念の歴史的・哲学的含意を踏まえた議論を提起してきました。恩師である福田歓一氏のデモクラシー論を豊かにする仕事だと言ってもよいかと思います。

第三の領域は第二の領域とも重なりますが、民族紛争や沖繩問題、とくにポスト冷戦の思想的混迷あるいは保守化に対して、かつて南原繁氏や丸山眞男氏がしたように警世の発言を行ってきました。エッセイ集『政治と知識人 同時代史的考察』に代表されますが、ある意味で「戦後知識人最後の騎手」とも言うべきなのかもしれないと思われれます。加藤先生は、研究・教育ばかりではなく、法学部の政治学科主任、法学部長を務められたほか、成蹊大学アジア太平洋研究センター所長、国際交流センター所長、成蹊学園専務理事、将来構想検討委員会委員長などの大学・学園の多くの要職を務められ、長年にわたり法学部のみならず大学、学園に多大な貢献をされてこられました。加藤先生のようなお力添えに対し我々後輩一同改めて心より感謝の念を表したいと思います。

このたび、定年により先生が大学を離れることになりましたことは、法学部として誠に残念なことでありますが、先生のご健康のほどを心よりお祈り申し上げますとともに、今後とも私ども後輩を温かくご指導ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。